

# 仏教史のなかのSGI——その思想的基盤

川田洋一

## 1 序

創価学会・SGI（創価学会インタナショナル）の研究には、さまざまな角度がある。国際政治論、組織論、民衆運動論、また、社会的観点等が試みられている。しかし、創価学会・SGIは、「仏法を基調とした平和・文化・教育の運動体」として自己を定義づけている。創価学会・SGIには、その運動の基盤に、東洋の長い仏教的伝統を有し、その土壌から、20世紀に、出現した「仏教団体」である。とりわけ、大乘仏教運動で

の重要な経典となり、中国、日本をはじめ、東洋の民族に、宗教を通して文化・芸術・建築にも多大な影響を及ぼしてきた『法華経』を主軸に、全世界へと運動を展開している団体である。

むろん、『法華経』の解釈とその実践化において、時代の変遷があり、21世紀の現代における独自の特質を発揮してはいるものの、創価学会・SGIの「依経」が『法華経』であることに変わりはない。

創価学会・SGIの『法華経』の解釈は、中国の天台学を基盤とし、日本の日蓮における深化・実践化を

通し、さらに、第二次世界大戦中における創価学会の初代牧口常三郎会長、二代戸田城聖会長の『獄中体験』によって、現代社会へと展開していったものである。

さらに、現今、創価学会第三代池田大作会長が、SGIを形成してから本格的な世界展開を行うに至って、その行動の基盤としての「仏教思想」が一段と注目すべき段階に入っているように思われる。

したがって、私は、この小論において、『法華経』を中心にして、創価学会・SGI論を形成してみたいのである。創価学会・SGIは、「仏教思想」、なかならず『法華経』の思想をいかに解釈し、また、未来の人類のために生かそうとしているのか、といった点に焦点を合わせたいのである。

以上のような意図のうえに、以下、次の順序で論じることとする。

第一に「創価学会・SGIの成立」の歴史を略記する。

第二に、その理論と実践の源流となっている仏教思想史的な伝統を、釈尊から『法華経』の編さん、中国

の天台、日本の日蓮を主軸にたどっていきたい。

第三に、創価学会・SGIの主要な運動である、「平和・文化・教育」を支える『法華経』の理念を抽出してみたいのである。

## 2 創価学会・SGIの形成

創価学会は、1930年11月18日、初代牧口常三郎会長と二代戸田城聖会長（当時、理事長）によって創立されている。創立当初は、牧口が教育者であり、会員も教育者が多く、価値創造をめざす集まりであったことから、「創価教育学会」と称している。牧口は教育者として、人間生活と教育・学問との関係を思索し、『人生地理学』『教授の統合中心としての郷土科研究』等の著作を残している。『人生地理学』は、現代的に表現すれば、「社会生態学」の先駆ともいえるべき業績である。

さらに、価値の創造、民衆の幸福と社会の繁栄を追求し、その集大成として『創価教育学体系』第一巻を刊行した。その刊行の日が1930年11月18日

あり、「創価学会」の創立の日としている。「創価」とは、価値創造の意であり、人生の目的は幸福の追求にあり、その実態は価値の創造であるとの思索にもとづくものである。

牧口は、創価教育のめざす理念のより深い意味を、『法華経』並びに日蓮の教えの中に見出し、人間の普遍的な価値を説く日蓮の教えを広めることに励んでいくことになる。

中心となるべき価値を、牧口は「生命」であると考え、「価値といひ得べき唯一の価値は生命であり、爾余の価値は何等かの生命と交渉する限りに於てのみ成立する<sup>(1)</sup>」と述べている。自他の生命を生かし、幸福をもたらす働きを善とし、善の価値の実現こそ、人間の幸福であるという。

牧口は、「大善生活」を実現することを目的に、『法華経』を依経とする日蓮の仏教を学び、実践していったのである。1939年、牧口は、創価教育学会の第一回総会を開催しているが、この年、第二次世界大戦が勃発し、日本の軍隊も暴走を重ね、中国や朝鮮、東

南アジアで蛮行を重ねていくのである。

彼は、日本の仏教界の多くが、戦争遂行の精神的支柱である国家神道に協力していった中で、平和実現への宗教的信念を断固としてまげなかったのである。

1941年12月、太平洋戦争に突入、その5カ月後、機関紙『価値創造』が治安当局の指示で廃刊となっている。牧口は、特高刑事の監視にさらされる中、軍部権力による国家神道の神札札押の厳命を拒絶し、1943年7月、戸田とともに逮捕されている。

牧口とともに獄中にあった戸田は、1945年7月3日に出獄。しかし、3千人の会員にまで達していた創価教育学会も、壊滅状況となっていた。

戸田は、牧口の人格、見識にうたれて師事し、創価教育学会の創設とともに理事長となり、事業経営等を通して牧口を支えていた。戸田は獄中で、「偉大なる宗教体験」をなし、出獄後、創価学会の再建にのりだしたのである。

この時から戸田は、「創価教育学会」を「創価学会」と改め、より広い活動をする宗教団体として出発した

のである。

1951年5月3日に、全会員の総意により、第二代会長に就任し、58年4月2日に逝去するまでに、創価学会は75万世帯を超えるまでに大きく前進したのである。

戸田第二代会長の後を継ぎ、池田大作第三代会長（現名誉会長）が、1960年5月3日に就任し、それ以来、創価学会は飛躍的に発展し、また、世界的に展開していった。そして、1975年1月24日、世界の各国の創価学会会員の代表がグアムに集い、SGI（創価学会インタナショナル）が結成されている。池田会長が、SGIの初代会長に就任したのである。今日、SGIは世界192カ国・地域に、1200万以上のメンバーを擁する仏教団体として、全世界の平和社会の建設に尽くしている。

### 3 仏教思想的伝統

創価学会・SGIの伝統は、釈尊を源流とし、『法華経』を依経として、インドの竜樹、世親を経て、中

国の天台と日本の日蓮へと発展的に継承されてきた仏教を信奉する教団である。日蓮は、インドの釈尊、中国の天台、日本の伝教という『法華経』の仏教者の系列のなかに自己を位置づけ、「三国四師」と呼んでいる。

それ故に、この章では、次の項目を立てて、創価学会・SGIの仏教的伝統をたどっていくことにする。

第一に、釈尊の悟り、第二に『法華経』の成立、第三に中国の天台の「一念三千」論、第四に日蓮の唱題行、そして第五に創価学会第二代会長戸田会長の獄中の体験の5項目である。

第一に、釈尊の悟りの内容を追っておきたい。仏教は、紀元前5世紀頃、その創始者である釈尊が出家成道したところから開始された宗教である。釈尊の出家の主要な動機は「生」「老」「病」「死」の四苦という普遍的な「人間苦」を解決することであったという。釈尊は、苦行、禪定によって、人間生命を包む生きとし生けるものの源泉をなす「宇宙根源の法」を覚知して、覚者となった。そして釈尊は、すべての人に、自

己と同じく、この「宇宙生命」を覚知させて、四苦を超克しながら、人間としての真実の幸福境界を確立する道を指し示したのである。

釈尊は、菩提樹の下で「自我意識」を基点としての「内なる宇宙」の探求を行っている。すなわち、自身、一個の人間生命の内面へと入っていったのである。

「自我意識」から「内なる宇宙」の深層領域へと深まるにつれて、探求は、個人の次元を超えて、トランスパーソナル(超個)な領域へと入っていく。すなわち、家族、友人等の心と通底する次元、民族、国家の次元、さらには人類心の次元にまで深まり、拡大していく。次いで生態系と共通する地平へ、そして、地球という惑星、恒星の生死流転の次元をも突破して、宇宙それぞれと一体となるところまで進んでいくのである。釈尊は、宇宙それぞれ自体の源泉となる「根源的な法」を自己自身の内奥に覚知したのである。

それでは、釈尊の悟達の究極に位置する「宇宙根源の法」とは、いかなる悟りの内実をさすのであろうか——「ウダーナ」<sup>(2)</sup>にうたわれる内容に、解脱の原点が

示されている。

夕暮れ、真夜中、そして夜明けに、釈尊の口から出てきた詩である。

「夕暮れの詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する。というのは、かれは縁起の法を知っているから」

「真夜中の詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する。というのは、かれはもろもろの縁の消滅を知ったのであるから」

「夜明けの詩」

「実にダンマが、熱心に入定している修行者に顕わになるとき、かれは悪魔の軍隊を粉碎して安立している。あたかも太陽が虚空を照らすのごとくである」

ここにいう「ダンマ」とは宇宙の根源的なものであり、即ち、「宇宙永遠なる法」の表現である。ここに示されるように、「夕暮れ」の詩では、「縁起の法」を

知ったことが明かされ、次いで、「真夜中の詩」では、迷いの「縁起」の消滅を知って、一切の疑惑が消滅したとされている。「ダンマ・ダルマ」の顕現は、根源の煩惱である無明（悪魔の軍隊）の断破と同時にであり、ここに「涅槃」の境地が開示される。

釈尊の悟達——それは、釈尊の人格体そのものである「内なる宇宙」を、宇宙根源の生命即ち「ダンマ・ダルマ」が、一切の無明、煩惱を粉碎し、「あたかも太陽が虚空を照らすごとく」照明しつくす大境地である。ここにおいて、「内なる宇宙」は、「外なる宇宙」と一体不二となっている。

玉城康四郎氏は、「ダンマ」について、「ダンマとは、まったく形のない、い、の、ち、の、い、の、ち、い、わ、ば、純、粋、生命ともいふべきものであろう」と表現されている。

この「ダンマ」は、「如来」とも同質であると、玉城氏はいう。<sup>(3)</sup>

この「ダンマ」が「如来」として大乘仏教の基盤ともなり、一切衆生における成仏の根拠である「仏性」「如来蔵」として展開されていくのである。

「ダンマ・ダルマ」を覚知した釈尊は、八〇歳で入滅するまで、東インドの各地を歩きに歩き、衆生救済の慈悲行に生き抜いたのである。この意味において、仏教は「智慧の宗教」であり、その「智慧」は「慈悲」となって発現していくのである。

第二に、釈尊滅後から、『法華経』の成立、並びに『法華経』について記してみると、次のようである。釈尊の滅後およそ百年ないしは二百年たった頃、仏教教団は上座部と大衆部に分裂した（根本分裂）。その後、紀元前1世紀頃までに、約二〇のグループに分裂した。この分裂以後の仏教を部派仏教と呼んでいる。部派仏教の主体は出家者であり、それぞれの学問的な教義を確立していったが、ともすれば学問仏教に偏っていった。その結果、民衆救済をおろそかにし、宗教としての生命を枯渇させていった傾向性は否定できないところである。

大乘仏教は、紀元前1世紀頃から、煩瑣な思弁に陥った伝統的・保守的な部派仏教の一部を激しく批判しながら、一切衆生の成仏（救済）を掲げての新たな運

動である。この過程で、多くの経典が編まれたが、そのなかの初期経典として『法華経』がある。大乘仏教は、釈尊の前世における呼び名である「菩薩」の慈悲行に仏教の根本を見出し、「菩薩」の道を宣揚するとともに、「ダンマ・ダルマ」においても、釈尊の悟達そのものにかえり、「宗教的真理」を開示しようとしたのである。

大乘仏教を推し進める人々は、独自の「覚体験」をなし、その禪定の場で「仏との出会い」（見仏体験）をなしたのである。その「覚体験」の「中核」を、『法華経』では「無上正等覚」として記している。菅野博史氏は、『法華経』は釈尊の悟りの原点を自覚的に踏まえて成立しています。このことは、釈尊のダンマの悟りと、梵天勧請による説法の決意という、まさしく仏教そのものの成立に焦点を当てて、『法華経』が制作されていることからわかります<sup>(4)</sup>。そして、菅野博史氏は、「釈尊は菩提樹のもとでダンマ（法）、サツダンマ（正法）を悟ったといわれる。『法華経』制作者は、このパトリ語のサツダンマに相当するサンスクリット

語サツダルマを経典のタイトルに用いて、サツダルマブンダリーカ・ストトラとし、諸仏の共通に説く究極の法として位置づけた<sup>(5)</sup>。『法華経』では、「菩薩」のために「無上正等覚」の悟りの法門を説くと宣言している。『法華経』は、「見仏体験」により、「ウダーナ」でうたわれた「太陽」としての「ダンマ・ダルマ」を、「無上正等覚」として覚知することをめざす経典である。

『法華経』には三大思想があるとされる。第1は、「万人の成仏」の思想であり、方便品では、この現象世界に釈尊が出現する目的が「一大事因縁<sup>(6)</sup>」（唯一の重大な目的）であると説かれている。これが一仏乗の思想である。「万人成仏」の実証として、二乗作仏、悪人成仏、女人成仏等が説かれていく。

第2は、釈尊は「永遠なる存在」であり、「如来寿量品」において「久遠の釈尊」として明かされる。『法華経』では、釈尊に即して、その本地に「久遠の釈尊」即ち「永遠なる仏」を洞察してくるのである。この「永遠なる仏」は、「永遠なる法」と一体であり、そのような「久遠の釈尊」は、永遠の救済者であるという思

想である。

第3は、地涌の菩薩の思想である。「従地涌出品」から登場する地涌の菩薩は、釈尊滅後の世界の『法華經』の担い手であり、「法師品」には「如来の使<sup>7)</sup>」として記述されている。その他、菩薩道の実践の姿として、不軽、葉王等の菩薩群が登場してくるのである。

以上の三大思想が、中国、日本では、天台や日蓮の思想の基盤をなすにいたるのである。

第三に、中国の天台は、6世紀後半、インドから中国へ伝えられた各種の經典を『法華經』を中心にして、仏教の統合化を試みている。それと同時に、「方便品」の十如是を基盤として「一念三千」論を形成している。

「一念三千」論は、『摩訶止観』において、心を観ずる観不可思議境の観法を明かす段で説かれている<sup>8)</sup>。

「一念三千論」は、我々の一瞬の心（一念）に三千世間をそなえているという思想である。三千の法数は、十如是・十界互具・三世間によって構成されている。三千とは、現象界を三千の差別相として表したものである。

十界とは、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、仏の十種類の境界をさし、十界のおのにおの十界を互いに具しているとす。十界互具が成立する。十如是は、十界のすべての活動にそなわる十種のあり方をさしている。つまり、十界のいずれの境界も、それぞれ十如是のあり方をとっているという共通基盤を有しているので、十界互具が成立するのである。

地獄界にも仏界と同じ十如是をそなえているので、地獄界のなかにも仏界などの他の九界がそなわり、逆に仏界のなかにも地獄界などの九界がそなわることになるのである。ここに「九界即仏界」という成仏の可能性が示されているのである。

さらに、この十如是に三世間がそなわっているの<sup>9)</sup>で、三千世間となる。三世間とは、五陰（身心）世間、衆生（社会）世間、国土（自然界）世間をいい、ここに生命主体とその環境である自然界にわたる生命の事実存在がつくされることになるのである。

天台は、一念にそなわる三千世間を観照することを



成仏のための修行としたのである。そのための修行を『摩訶止観』で説き、出家者のための修行法としたのである。

第四に、日本の日蓮は、このような天台の「一念三千」論を引き継ぎながらも、一切衆生の成仏のための法理として、深化し、具現化するのである。日蓮は、「一念三千」を衆生の成仏を可能にする仏種（成仏の子）と表現し、末法の時代においては、「南無妙法蓮華経」であると説いたのである。

「南無妙法蓮華経」は、宇宙根源の法、即ち「永遠なる法」であるとともに、仏界の生命そのものである。即ち、『法華経』寿量品に示される、「永遠の法」と一体の「永遠の仏」「久遠の釈尊」である。ここに、インドの釈尊の覚知した永遠の法<sup>8</sup>「ダンマ・ダルマ」とその法を表出した『法華経』と、中国の天台の「一念三千」と、日蓮の「南無妙法蓮華経」が一線につながってくるのである。

日蓮は、この「南無妙法蓮華経」を末法の民衆が根本として尊敬すべき「本尊」として明示したのである。

日蓮は、「十界互具」「一念三千」として示される成仏の可能性を、すべての民衆が現実化するために、『法華経』の後半である「本門」とされる部分に着目し、ここに重点をおいている。

日蓮によれば、「見宝塔品」からすでに本門がおきるとし、ここから「虚空会の儀式」<sup>9</sup>に入り、「従地涌出品」における地涌の菩薩の出現を経て、「寿量品」が説かれ、「久遠の仏」が説かれるという。

日蓮は、この「寿量品」が説かれたときの「虚空会の儀式」を、本尊の相貌として用いられたのである。「虚空会の儀式」において、時空を超えて普遍的な価値をもつ「永遠の法」即ち「永遠の仏」が象徴的に表出されているからである。すべての民衆は、この「本尊」曼荼羅<sup>10</sup>に題目を唱えることによって、内奥の仏界、即ち宇宙根源の法を顕在化することができるのである。

このように、日蓮は、釈尊、『法華経』、天台を継承しつつも、仏教史上、末法といわれる時代に、民衆が自ら仏界を顕在化する修行法を確立したのである。

第五に、戸田の『獄中』での宗教体験について述べていく。

『法華経』を中心として展開された戸田の『悟達体験』によって、『法華経』という經典、並びに日蓮の仏教が現代世界へと蘇り、宗教活動の原動力となった。

池田の『人間革命』から、主要部分を引用し、紹介すると次のようになる。

まず、天台によって『法華経』の開経と位置づけられた「無量義経」にある『仏身』を三十四の否定句で説いてある文に出会い、『仏とは何か』を問いつづけ、唱題と長い思索の末に「仏とは生命そのものである」と覚知するに至った箇所である。

「彼は唱題を重ねていった。そして、ただひたすらに、その実体に迫っていった。三十四の『非』を一つ一つ思いうかべながら、その三十四の否定のうえに、なおかつ厳として存在する、その実体はいったい何か、と深い深い思索にはいつていた。時間の経過も意識にない。いま、どこにいるかも忘れてしまった。

彼は突然、あっと息をのんだ。——『生命』という言葉が、脳裡にひらめいたのである。

彼はその一瞬、不可解な十二行を読みきった。……  
——仏とは生命なんだ！ 生命の表現なんだ。外にあるものではなく、自分自身の命にあるものだ。いや、外にもある。それは宇宙生命の一実体なんだ！」<sup>(10)</sup>

戸田は、このようにいきさつを「生命論」という論文でつづっている。「小宇宙」としての自己の生命が、永遠なる「大宇宙」と一体となった『宇宙即我』、『我即宇宙』の『宗教体験』である。

この戸田の「生命論」は、釈尊の悟りの表現としての經典である『法華経』と天台と日蓮の教えを『生命』というキーワードで結びつけ、創価学会・SGIの教義を方向づけたものである。戸田は、獄中で『法華経』をくり返して読み、『法華経』は全体として何を言おうとしているのか、何のために説かれたのかという問題をつきつめていった。思索を集中していたある朝、『法華経』に説かれる「虚空会の儀式」に地涌の菩薩として参列している自己自身を発見するのである。

『法華経』の第十五「從地涌出品」には、大地の底から六万恒河沙といわれる菩薩——地涌の菩薩という——が涌現してくる。その上首にるのが、上行菩薩である。

池田の『人間革命』には、次のように記されている。「彼は自然の思いのうちに、いつか虚空にあった。数かぎりない、六万恒河沙の大衆の中にあつて、金色燦然たる大御本尊に向かつて合掌している、彼自身を發見したのである。

夢でもない、幻でもなかった。それは、数秒であつたようにも、数分であつたようにも、また数時間であつたようにも思われた。はじめて知つた現実であつた。喜悅が全身を走り、——これは嘘ではない、おれは今ここにいる！と、自分で自分に叫ぼうとした。

……  
彼は涙のなかで、『靈山一会、儼然未散』<sup>(11)</sup>という言葉

を、ありありと身で読んだのである。  
靈山一会儼然未散<sup>(12)</sup>の文は、中国から伝わったものであり、日蓮の遺文にある。

この体験により、戸田は、経文上においては上行菩薩の再誕とされる日蓮とともに、仏教史において末法とされる現代世界に、『法華経』を中心とした仏教を基調に、民衆の救済に向かうという宗教的使命に立つたのである。この自覚こそ、戸田をして創価学会の再建へと向かわしめる原動力となり、創価学会・SGIの活動を決定づけたのである。

#### 4 平和・文化・教育への展開 ——SGI憲章の具現化

創価学会・SGIの「平和・文化・教育」運動は、仏教思想を基盤として展開するものである。今、この運動の基礎となる仏教思想を、『法華経』を中心に取り上げておきたい。

日蓮は、『法華経』の「一念三千」の思想にもとづき、また、自らの宗教的使命の上から、13世紀の日本において『立正安国論』を著している。この論によって、仏教者がどのように社会と関わっていくかを示している。

日蓮の『立正安国論』は、天変地異や疫病・飢饉によつて苦しむ民衆の姿から説き起こされている。この苦悩の人々を救い、この世界に「仏国土」即ち理想社会を実現して「安国」を達成することを目標として書かれた著作である。

そこでは「国を失い家を滅せば何れの所にか世を通れん汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を禱らん者か」と、人々の幸福とその基盤をなす世界平和を訴えている。

「立正」とは、『法華経』から帰結される「人間の尊厳」「生命の尊厳」の理念が人類社会を支える思想として確立されることである。「安国」とは、社会を繁栄させ、平和を実現して、人々の生活を安穩にすることである。

その場合、日蓮の用いる「くに」の漢字が重要な示唆を与える。「立正安国論」では、「国」（王が領土の中にいることを示す）、國（戈という武器が記されている。武器で領土を守る姿を示す）、そして「國」（民衆が生活する場）の三種を用いている。しかし、約8割が「國」を用い

ている。このことは、国にとつて「民」こそが根本であることを示すのである。

「民」が根本であるということは、民衆こそが自己変革しつつ、平和、安穩の社会へと変えていく主体者であるという理念をあらわしている。

日蓮は、『法華経』に示される「娑婆世界即寂光土」「此土即仏国土」の理念の実現をめざし、仏教思想による現実世界の変革へと向かったのである。

その行為は、釈尊以来の、現実社会の中での「慈悲」の実践による「仏国土」の建設を引き継ぐものであり、その視野は、人類を含めた生きとし生けるものに及んでいたのである。

したがって、「立正安国」の「国」は、地球人類並びに自然生態系（「仏国土」「宝土」と表現する）を包含している。民衆を主体にして、この地球上に、「仏国土」「宝土」を創出していくのが、仏教者の社会的使命である。

創価学会・SGIは、釈尊から日蓮に至る「人間主義」の哲理と実践を、20世紀、今世紀の現代に蘇らせ、

人類救済、社会変革のために、平和・文化・教育の分野で実現していくことを社会的使命としている。

SGI憲章の(14)前文には、次のように記されている。

「我ら創価学会インタナショナルの全ての構成団体及び構成員は、仏法を基調とする、平和・文化・教育への貢献を目指してゆく」

「日蓮大聖人の仏法は、人間生命の限りなき尊厳性を説き、全ての人を包容する慈悲といかなる困難をも克服する智慧をもたらす法である。そして、この智慧は人間精神の創造性を拓き、人類社会の直面するいかなる危機をも克服し、平和で豊かな共生の人類社会を實現できることを説く、『人間主義』の法である」

「我らSGIは、この『人間主義』に基づく『世界市民の理念』『寛容の精神』『人権の尊重』を高く掲げ、非暴力と対話により、こうした人類的課題に挑み、人類社会に貢献することを深く決意して、ここに以下の目的及び原則を確認し、このSGI憲章を制定する」

この後、「目的と原則」として、「世界市民」「寛容の精神」「人権」を基調に、具体的な行動原則が10項

目にわたって定められている。

そこで、この章では、憲章の理念をSGIがどのように具現しているのかを、「平和」「文化」「教育」に分けて、主として仏教思想の面から取り上げていきたい。

第一に「平和」運動であるが、今日では、当然、環境問題も含んだ「地球的問題群」に及んでいる。つまり、「仏国土」「宝土」の創出である。

「平和」運動の根本思想は、『法華経』の「生命の尊厳」にのっとって、戸田によって示されている。『法華経』の一念三千論には、「十界互具」が説かれているが、この法理は、すべての人々の生命に、仏界という尊厳の当体がそなわっていることを示している。

『法華経』によれば、「仏界」は、人間生命のみならず、すべての生物・無生物にまで内具されているという。これを「仏性」「法性」ともいう。この宇宙万物に具された「仏性」を傷つけ、苦しめ、その発動を拒否する動き——仏教では「魔」というが——への挑戦こそが、創価学会の平和運動の根本理念である。

戸田は、1957年に「原水爆禁止宣言」を発表し、青年達への「遺訓」としたのである。この「宣言」の主要部分は次の通りである。

「核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今、世界に起こっているが、私はその奥に隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う。それは、もし原水爆を、いづこの国であろうと、それが勝つても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっており、サタンであり、怪物であります」<sup>(15)</sup>

ここに「死刑」という言葉が出てくるが、戸田は、当然、仏教者として死刑廃止論者である。その戸田が「死刑」という言葉を使ってまで糾弾している当の「もの」こそ、「魔」である。この「魔」とは、人間の「生存の権利」を根底から奪い取り、人類総体を文字通り「阿鼻叫喚地獄」へと突き落とす働きである。

人類の「種」としての生存さえ断絶しかねない「原

水爆」という兵器の本質を、イデオロギー、政治体制、人種、民族、国家の次元を超えた「人間生命」の深部から告発したのが、この「宣言」である。

池田は、「平和提言」<sup>(16)</sup>の中で、この「魔」の正体を、仏教者として、次のように照明している。

仏教法理の光を当てるとき、「魔」とは、欲界という欲望の頂点に出現し、「他化自在天」の働きをなす。つまり、人間の生存の権利を奪い、生きとし生けるものの生存権さえ奪い去っても、他者を自らの食欲や瞋り、エゴのままに支配しようとする「生命の魔性」である。

この「魔性」は、欲望の世界の頂点において、貪欲と化した権力欲、名誉欲、支配欲となり、他者への怨恨、暴力性となって顕在化する根源的エゴイズムである。核兵器や生物化学兵器に象徴される大量破壊兵器を使用してまでも、貪欲や瞋恚となって発現する根源的エゴイズムが「生命の魔性」である。

戸田の宣言は、「原水爆は生存の権利を脅かす人類の敵である」と断じ、原水爆を使用したものは、戦争

の勝者、敗者を問わず絶対に許してはならないという思想を世界に広めようとの提言である。

東西の冷戦が、その極みに達していた時の、この「平和提言」は、大きな反響を呼んだのである。

広島、長崎という世界で唯一の被爆国・日本の仏教団体、しかも、この時、75万世帯に達しようとしていた創価学会の、仏教の「生命尊厳」の理念に根ざした「宣言」であったからである。

この「平和宣言」が、創価学会・SGIの平和運動の源流となり、以後、人間並びに生きとし生けるものを守る具体的な平和・環境運動の展開となるのである。

さらに、現今では、地球温暖化や異常気象、砂漠化、海洋汚染等による人類生存の基盤をなす地球生態系の危険が切実なものとなっている。人間の生存権のみならず、生きとし生けるものの生存を奪い去る「魔」の働きの顕在化である。このような地球環境問題への挑戦も、仏教者の重要な使命である。

仏教の自然観は、生きとし生けるものとの共存であ

る。その一つが、中国の妙楽の示す「依正不二」論である。

妙楽の『法華玄義釈籤』に、「已に遮那の一体不二を証す（中略）三千の中生陰の二千を正と為し、国土の一千を依に属す<sup>(17)</sup>」とある。

「遮那」とは「毘盧遮那仏」のことであり、この宇宙の大仏の生命において、「依報」と「正報」は一体不二である。ここに「正報」とは、生命主体——例えば、人間生命——をさし、「依報」とは、その環境世界をさしている。仏の大生命においては、生命主体も、その環境も「不二」であり、融合しているものである。人間生命も、生きとし生けるものも、すべて、仏の大生命（宇宙生命）をそなえているのであるから、いかなる生命主体もその環境とは「不二」であり、切り離せるものではない。この法理を「依正不二」というのである。

なお、妙楽大師の文では、その後、「一念三千論」を使って、三世間のうち、五陰世間と衆生世間が「正報」に属し、国土世間が「依報」に属することになる

と分析しているが、しかし、このように「正報」と「依報」をわけて考えても、本来、「三世間」は「不二」であることを示そうとしたのである。

創価学会・SGIの「地球的問題群」への各種の運動は、この「依正不二」論を理念としている。「依報」である「環境」への侵害は、それと一体である「正報」への侵害であり、自然環境の崩壊は、そのまま人間生命の侵害、生存の基盤の崩壊を意味する。この「痛み」を、人類が、生きとし生けるものと「共有」する心から、「持続可能な開発」に向けての運動が展開されゆくのである。

創価学会・SGIの「積極的平和」をつくりゆくための具体的運動としては、池田SGI会長の毎年「平和提言」がある。また、SGI会長は、平和研究の機関として、戸田記念国際平和研究所を設立している。この提言をうけて、SGIは、国連のNGOとして、「核兵器・戦争」反対への展示、出版、講演、啓蒙をつづけている。また、人権展、人道援助も世界各国・地域で行っている。「持続可能な開発」に向けても、

国連と連動しつつ、展示（変革の種子展）、映画（静かなる革命）、世界各国での植樹を行っている。

第二に、創価学会・SGIは、この地球上のあらゆる文化の共生、共栄をめざしている。多文化共生の姿を表示する仏教のイメージを二つの經典から取り上げたい。

まず、華嚴哲学のなかでの「重々無尽縁起」を示す一つのイメージである。『華嚴経探玄記』に、「因陀羅網重重無際微細相容主伴無盡」とある。因陀羅網と呼ばれる帝釈天（インドラ）の宮殿に飾りとしてかけられている網を譬えとして重々無尽の縁起の世界を表現するのである。

この網は、一つ一つの結び目に宝珠があつて、それらの宝珠は互いに映りあい、更に映じた宝珠がまた映じあつて、重々無尽に映りあうのである。一切の現象が、互いに縁となりあつて生起し、榮えていくのである。華嚴のこの世界観は、自己の生命の深み、無限の広がりを示す法理である。

今、このイメージを、地球上に開花しゆく「平和の



文化」の姿とすれば、各宝珠は、それぞれの民族、人種、国家、宗教のもつ各文化をさすことになる。地球上の「文化」は、歴史的にも、現在も、互いに縁しあい、交流しあい、独自の美を演出するのである。多様、多彩な文化が互いに映しあう（縁しあう）ことによって、創造性を得、新たな発展をとげゆくのである。各文化（宝珠）が、無尽に映りあい、美を創造しゆく姿こそ、仏教の理想とする「平和の文化」である。

多彩な文化の共生、共創の原動力は、それぞれの文化がその土壌である民族、人種、宗教からさらなる栄養を吸収しつつ榮えゆくとともに、他の文化の「縁」を受けて、相互に学び、触発しゆく行為にある。そして、その行為とは、「対話」「交流」「参画」である。

また、『法華経』「葉草喻品」第五には、大宇宙、大自然と草木との関連が、次のような譬喩として説かれる。

「迦葉よ。譬えば三千大千世界の山川・谿谷・土地に生ずる所の卉木・叢林、及び諸の葉草の如し。種類は若干にして、名色は各おの異なり。密雲は弥く布き、

遍く三千大千世界を覆い、一時に等し澍ぐ。……一雲の雨らす所なるも、其の種性に称いて、生長することを得、華菓は敷き実る。一地の生ずる所、一雨の潤す所なりと雖も、諸の草木に各おの差別有り」<sup>(19)</sup>

この世界に、さまざまな草木が育まれている。そこに雨がふりそそぐ。大地の栄養を吸収し、雨の恵みをうけて、草木が蘇り、榮えていく。それぞれの個性、特質に従って天・地の恵みをうけて榮えていく。

日蓮は、この『法華経』の法理にもとづいて、「御義口伝」において、「桜梅桃李」の原理を示している。<sup>(20)</sup>

即ち、この大宇宙の慈悲の働きの中で、桜は桜としての個性、特質を發揮し、そこに内具された「仏性」を最大限に発現していくことである。これを、日蓮は、「自体顕照」<sup>(21)</sup>とも表現している。梅も桃も李も同じく、それぞれの個性を最大限に發揮していく、その個性の開花を支えるのが、大宇宙・大自然の恵みである。

大地の基盤と大雨の恵みは、ともに大宇宙・大自然の万物を育む慈悲の働きをさしている。この多彩な「卉木」「叢林」「葉草」を、各民族や宗教のもつ文化の表

象ととれば、各文化は、大宇宙・大自然の慈悲の働きに支えられ、養われて、それぞれ独創的な開花と結実をなすのである。それぞれの文化が「自体顕照」の姿をあらわしつつ、この地球という大自然のなかで共生し、共存するのである。ここにも、仏教の描く「平和の文化」のイメージがある。

創価学会・SGIは、「平和の文化」のイメージを具現化するために、さまざまな文化・学術活動を全世界へと展開している。

SGI会長によって、学術機関としての当研究所、文化・音楽団体としての民主音楽協会、富士美術館が創設されている。これらの機関を中心に、「学術交流」「芸術交流」が行われ、世界中の「文化」の交流を促進している。

当研究所においても、「寛容の精神」を根本に、「宗教間対話」「文明間対話」を継続している。これまで、ロシアでは、現「ロシア科学アカデミー東洋古文书研究所」と「仏教」を中心としての対話を行い、また、ヨーロッパ科学芸術アカデミーとはキリスト教との対

話、中国社会科学院世界宗教研究所とは主に仏教、儒教、道教の対話を行い、人類的課題をめぐり意見を交換し、相互に学びあっている。

人類的課題としては、平和問題とも関連するが、直接的暴力、間接的暴力の超克のために、各宗教、民族、国家、文化、性別、貧富の格差の間に、共存への「橋」をかける努力をしている。

また、当研究所は、現「ロシア科学アカデミー東洋古文书研究所」の協力のもとに、「法華経とシルクロード展」を、日本、オーストリア、ドイツで開催し、『法華経』に込められた仏教者のメッセージを世界の人々に伝える努力をしている。池田SGI会長は、「対談」「詩」「写真」等を通しての文化・文明の交流に尽くしている。

第三に、創価学会・SGIの運動の源流は、当然のこととして、牧口の「創価教育学」にある。牧口は、子どもの自由と個性を重んじ、人生の真の価値をみつめ、生命内在の「無限の可能性」を開いていく「自立した人格の形成」をめざしている。人生における真の

幸福の達成——牧口は、「大善」という自他とも幸福をめざした——は、そのまま教育の目的でもある。

したがって、牧口の「創価教育学」の目的を、教教的に表現すれば、『法華経』の「菩薩的人格」の形成といえよう。

『法華経』には、多彩な菩薩が登場し、それぞれの個性、特質をもって使命を果たしていく。涌出品に登場する地涌の菩薩をはじめ、非暴力対話に徹する不軽菩薩、また慈悲の弥勒、智慧の文殊、学理の普賢、世音を観じる観世音、音楽に秀でた妙音、医薬の大家である薬王等が活躍している。それぞれの菩薩は、自らの内具された特質を最大限に発現し、衆生救済のために尽くしていく。

創価学会の教育の理念も、まさに、「菩薩的人格」の形成にあり、このような人材群を輩出して、人類のために尽くすことにある。

『法華経』「方便品」第二に、釈尊がこの世へ出現した目的が「一大事因縁」として説かれている。

「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄な

ることを得しめんと欲するが故に、世に出現したまう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したまう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したまう。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したまう」<sup>(22)</sup>

この法理を「開示悟入」と表現するが、牧口も『創価教育学体系』執筆の中で、この法理を思索した跡が、メモとして残されている。

「仏知見」とは「仏性」と同義であり、人間に内具された「無限の可能性」である。この「可能性」を最大に發揮し、自他とも幸福をめざす「菩薩的人格」を形成しゆくために、創価学会は、種々の教育運動を展開しているのである。「菩薩的人格」とは、まさしく「世界市民」の人格像をさし示している。

創価学会・SGIは、教育運動の具現化のために、SGI会長が、創価学園、創価大学、アメリカ創価大学等を創設し、創価一貫教育の理念と活動を全世界へと広げている。

換言すれば、釈尊が『法華経』「方便品」第二で述

べられた「一切の衆をして、我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき」<sup>(23)</sup>という誓願を引き継いで、この現実世界に実現しゆく運動である。

この小論で、私は、創価学会・SGIの人間主義の思想的基盤を仏教思想、なかんずく『法華経』を基軸にして分析を試みた。釈尊、天台、日蓮と続く長い仏教的伝統に根ざし、創価学会・SGIは、世界市民を輩出しつつ、平和・文化・教育の分野で、さらなる人類への貢献をなしゆくものと思われる。

#### 注

- (1) 『牧口常三郎全集』第5巻、第三文明社、232頁。
- (2) 玉城康四郎『仏教を貫くもの』大蔵出版、41・42頁。一部、略した。
- (3) 玉城康四郎『仏教の根底にあるもの』講談社学術文庫、23・27頁。
- (4) 菅野博史『法華経の出現』大蔵出版、16頁。
- (5) 菅野博史『法華経入門』岩波新書、18頁。
- (6) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、120頁。
- (7) 同書、357頁。

- (8) 『大正大蔵経』巻46、54頁。
- (9) 「虚空会の儀式」は、『法華経』説法の会座の一つ。『法華経』は「見宝塔品第11」から、「嘱累品第22」までの12品は虚空会で説かれる。前後の品は靈鷲山で説かれる。

- (10) 池田大作『人間革命』第4巻、潮文庫、16・17頁。
- (11) 同書、21頁。
- (12) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会、757頁。
- (13) 同書、31頁。
- (14) 「SGI憲章」『聖教新聞』1995年11月24日付。
- (15) 『戸田城聖全集』第4巻、聖教新聞社、565頁。
- (16) 第32回「SGIの日」記念提言。
- (17) 『法華玄義釈籤』『大正大蔵経』巻33、919頁上。
- (18) 『華嚴経探玄記』巻1、『大正大蔵経』巻35、116頁上。
- (19) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、241・2頁。
- (20) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会、784頁。
- (21) 同書、784頁。
- (22) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、121頁。
- (23) 同書、130頁。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)